
魔法少女まりね マギカ

空雲雛太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まりね マギカ

【Nコード】

N2755Z

【作者名】

空雲雛太

【あらすじ】

まず始めに断っておきたいことは、この物語は娯楽要素のない八つ当たりだということだ。原作のラストに納得できなかったにわかファンが駄々をこねているだけの駄作にして、原作のあらゆる全てを踏みにじる愚作。自分の望んだラストのために、登場するキャラクター全てを不幸にするだけのマイナス……故に、この作品は他の誰よりも原作ファンの方におすすめしない。

読めば必ず、原作の感動全てが台無しになってしまうから。（

本当に原作ファンの方にはおすすりできません。何せ作者はマンガ版を讀んだだけのにわか知識で書いているので、あなたの見たまどマギからだいぶズレています。クソゲーの類いが好きな方はどうぞ

プロローグ（前書き）

「そーゆうのはね、よくあることさ

「自分の正しさを信じ込んで意固地になればなるほど「幸せって遠ざかっていくもんだよ」「悔しいけどね」

「わたし、何かしてあげられないのかな…」

「そいつばかりは他人が口突っ込んでも綺麗な解決にはならないねえ」

「……………」

「それでも解決したいかい？

「だったら間違えればいいのさ」「正し過ぎるその子の分まで「誰かが間違えてあげればいい」

「間違える…？」

「そ。「ずるい嘘をついたり怖いものから逃げ出したり…」「最初は理解してもらえないかもしれないけど」「後になって正しかったと解る事もある」「どうしても行き詰まったなら、いつそ間違えるのも手なんだよ

「 「あんたはいい子に育った」「嘘もつかないし悪いこともしない」「いつも正しくあろうと頑張ってる、子供としてはもう合格だ」「だから大人になる前に上手な転び方を練習しておきな」「大人になるとねえ、プライドとか責任とか…」「どんどん間違えるのが難しくなっちゃうんだから」

「……………うん「ありがとう、ママ…」

公式コミカライズ『魔法少女まどか マギカ』 2巻第6話より

ブローグ

毬を蹴る音って知ってるかい？知らないだろうね、あたしだって知らないけど。そもそも毬自体を見たこともないしね。

まあ今の世の中じゃ、知ってるやつのほうが少数派だろうさ。今に限った話じゃないけどね。

大昔には、毬を蹴るなんて娯楽はそもそも一般的な娯楽じゃなかった。

自分じゃ何もせず暇を持て余し、自分の食う飯一つに農民がどれだけ苦労したかを知らない貴族様の娯楽だった。

毬を蹴る音を知ってるってのは、昔なら無知の証明でしかない。今なら物好きの立証ってところかな。

けれど貴族は、自分達の糧となる不幸を知らなかったからこそ幸せいっぱい暮らせたんだ。無知は罪でも罰でもなくて、救いだよ。老若男女に人気の焼き肉だって、製肉過程を知らないほうが美味しくいただけるのさ。

『殺された命に感謝して食べる』っていうあの言説も、考えてみれば独善的だよな。あたしが殺された命なら、感謝されたってちつとも嬉しくないぜ。むしろ、よくも殺してくれたなと怨み言を連ねたい気分だろうさ。感謝はいいから未来を返せってね。

おおっといけない、話が脱線しちゃったよ。話が四方八方に四散するのはあたしの悪く癖だぜ。まあつまり要するに何が言いたかったかと言うとだね。

いいかい毬音、あんたは無知でありなさい。傲慢な知であるよりも、幸せな無知でありなさい。

他人の苦しみなんか見ちゃいけないよ。そんなもんは、お前を殺す毒でしかないからね。

名前のせいで（前書き）

「うーん「リボン」どっちにしよう」

「こっち」

「…派手じゃない？」

「それくらいが丁度いいよ」「これで

もモテモテだな」

「もう、ママ！からかわないでよ！」

「ホントホント」

「じゃ、行ってくるわ」

「いつてらっしやい」

ももう行かないと

「うん「行ってきます！」」

「ごめんっ！さやかちゃん、仁美ちゃん！」

「おーっ、きたきた「遅いぞ」」

「さんおはようございます」

「あれ、リボン変えたんだ？」

「派手じゃない？」

「とっても素敵ですわ」

「ほほう？イメチェンして仁美みたいにモテようってのかこいつめえ！」

「ちっちがうよっ」

「そんな子はあたしが嫁にもらってやる！」

「ええ！？」

「ふ…二人とも！始業時間が！」

「うわっやばっ！」

公式コミカライズ『魔法少女まどか
マギカ』1巻第1話より
一部修正

名前のせいで

母が夢に出てきました。

両親が死んで3日が経つけど、未だにどういう心境であるべきかわかりません。

悲しむべきなんでしょうし悲しみたいたいんですけど、母があれだと素直に悲しめません。悲しいと認めたら、夢枕で1週間はからかわれる氣もしますし。

父は優しい人でしたし（その性格ゆえに、よく母に振り回されていた）、こっちは普通に悲しいですが、母の死を悲しめない以上、父の死を悲しむのはこう……フェアじゃありません。

死因は交通事故でした。

どちらかといえばありふれていると思われます。

ありふれた日常の中で、ありふれた（？）理由からありふれた（嘘）両親を失う。

それはあまりにも唐突なことで、正直未だに実感がわきません。

母とか特に死ななそうですし。

「いつてきまーす」

「……………」

「いつてきまーす!」

「……………」

「いつてきまーす!!」

「はいはい、そんな大きな声を出さなくても聞こえてますよ」

「ダウト!」

「いつてらっしゃい。氣をつけてね」

やっぱり聞こえてないっばいです。

両親を失った私は、ここ見滝原市の祖母の家に身を寄せていました。祖父は私が生まれる前に他界したと聞いています。死んではか

りな私の家族です。

生前の父に『何かあったら行ってくれ』と頼まれていたし、身内が他になかったのでここに来ました。『何かあったら』とは、実は私のことではなく祖母のことなのですが。

祖母は少々難聴（少々……？）気味で、大きな声を出さないとコミュニケーションが取れないという重大な欠点を抱えているのです。何で補聴器を着けないのでしょうか……？

「道は……こっちで合ってたっけ？」

家を出た私が目指しているのは、今日から私の通うことになる見滝原中学校。歴史ある伝統校ですが、最近改装したとのこと、すごくおしゃれな外観の学校でした。

転校の手続きのために一度訪れてはいるのですが、新生活への緊張からか、いまいち自分の記憶に自信が持てません。

「……困りました」

このままでは遅刻してしまいます。転校早々不良さんデビューしてしまいます。それは嫌です。かといって、周りの人に道を聞くのに勇気が……

「……なんて言っていられませんよね」

周りには私と同じ制服の人が……私の通うことになった見滝原中学校の生徒の姿がちらほらと見受けられます。皆さんに聞けば確実な上に、上手くいけば転校初日からお友達が出来てしまいます。我ながらなんて妙策……私の前世は諸葛孔明だったのではないのでしょうか。

「あの……すみません」

とりあえず2人以上で登校している生徒に話しかける勇氣はないので、ぼつちで登校している優しそうな人に声をかけます。

「はい？何かしら？」

『優しさ』を表情で表したような笑顔で、ぼつちさんが私に応えます。

綺麗な金色の髪を2つのチョココロネみたいに束ね、とても羨ま

しい胸部を持つその女性に、私は意を決して質問をしました。

「あの、私！本日付で見滝原中学校に転校してきた、築地 毬音と申します。お恥ずかしい話なのですけど道順に自信が無いので、もしよろしければぼっちゃんとご一緒させて頂きたいのですが……」
「噛まずに言えました！我ながら芥川賞を狙えるくらいの名文でしたね！」

「……えと、ぼっちゃんつてもしかして私のことかしら……」
しまりました。

名前を知らなかったとはいえ、うつかり心の中の呼称をそのまま使用してしまいました。こんなことだからあの母に『年始めの空っぽ郵便ポスト』なんて不名誉極まりないあだ名を付けられるのです。
「いえその弁解させてください釈明させてください！あの悪気はなかったんです口が勝手についていうかそのええとそう！これはきつと悪い魔女の仕業です！気付かないうちに悪い魔女の口づけを受けてそれで……」

「悪いことをしたら？」「ごめんなさいいいい！！」よく出来ました
「

転校して最初の土下座です。初土下座記念日といったところでしようか。そんな記念日は嫌です。何を記念しているのですか私は。
「ほら、頭をあげて？年頃の女の子が往来で土下座なんかしちゃダメよ」

かがんで私に目線を近づけ、優しく微笑んでそう言ってくれるチヨココロネさん。この体勢だとちようどコロネさんのパンツが見え「ちよっ、どうしたの！？何で急に地面に頭を打ち付け始めたの！？」謝罪している身でどこを見ているのでしょうか私は。万死に値します。

「何もそこまで自虐的にならなくてもいいでしょう？私もそんなに気にしてないから……」

「……許して、くれるのですか？」

「ええ、もちろん」

「ぼっちさん呼ばわりも謝罪中にパンツを見たことも許して下さるのですか、コロネさん！」

「パ……ッ!?」

顔を真っ赤にしてスカートの裾を掴むコロネさん。物理的にも心理的にも距離が出来てしまいました。

「そういうことならもつと誠意を込めて謝って！」

「ごめんなさいiiiiiiii!!」

日本土下座大会とかあったら、全国大会を狙えるくらいの土下座だったと思います。

「……巴 マミよ」

5分ほど謝り倒してようやく許してもらい、結局一緒に登校して下さった人（ いい人です ）は、警戒心に彩られた表情のままではありましたがそう名乗ってくれました。

「巴さんですか。素敵なお名前です」

「そんな取って付けたみたいに誉めて頂かなくて結構です！」

すっかり嫌われてしまいました。まああんな一幕のすぐ後にフランクに接されてもそれはそれで困りますけど。難しいところです。

「いえ、本当に羨ましいです。……名字が築地で名前が毬音って、母の悪意を感じます」

「そんな風に言っちゃダメよ築地さん。あなたの『毬音』っていうお名前にも、ご両親の願いが込められているんだから」

「……この名前に込められた願いって『幸せな無知であれ』ですよ？」

「……き、きつと直接本人に言うのが恥ずかしかったのよ！だから照れ隠しにそんな由来にしたんだと思うわ！」

さっきまで警戒していた相手を慰める巴さん。やっぱりいい人です。何でぼっちで登校しているのかわかりません。

「あつ、見えてきたわ！あれが、今日からあなたの通う学校……三滝原中学よ」

「改めて見ても、やっぱりおしゃれですねえ……。前に私のいた学校なんか、床も壁も天井もゼーんぶ木張りでしたよ」

「それはそれでかなり特殊だと思うけど……」

困ったような笑顔を浮かべる巴さん。最初の警戒心はすっかり消え失せているようです。……いや警戒心は私が植え付けたんですが、校門をくぐり、昇降口に足を向けたあたりで、初日は来客用の玄関からくるように言われていたのを思い出しました。

「巴さん、ありがとうございます。ここまでで大丈夫です」

「そう？でも昇降口までは一緒なんだし、遠慮しなくていいのよ？」
さっきまで警戒していた相手にそんなことが言えるなんて、優し過ぎますよ巴さん。惚れちゃいそうです。

「いえ、私ももう少し巴さんとお話したいのですけど、初日は来客用の玄関からくるように言われているもので……」

「あら、そうだったの。じゃあ仕方ないわね。慣れるまで大変だと思うけど、頑張ってね」

いけません、この流れで別れてしまつては、せっかく訪れた友達を作るチャンス逃してしまいます。巴さんはすごくいい人ですし、なんとかして明日に繋げたいところです。

「あの、巴さん！」

「？ どうしたの、築地さん」

「もしよろしければ、明日待ち合わせをして一緒に登校しませんか！？」

「ふえっ！？」

再び顔を真っ赤にする巴さん。な、何でしょう……今朝のことを思い出して警戒しているのでしょうか？

「い……一緒に登校……！？あれって都市伝説じゃなかったの！？」
「通学路にもけっこういましたよ！？」

巴さんには世界がどんな風に見えているのでしょうか。その生い立

ちには興味が尽きませんけど、今は登校の約束です。うかうかしてたら、他の人にとられちゃいます！

「巴さん……友達って、『なるう』って言うってなるものじゃないと思うんです……。友達って！ 気が付いたらなっているものだと思うんですよ！」

「ッ！！」

巴さんは私のただならぬ気迫に吞まれているようです。ここが正念場です！周囲の奇異の目を無視して、巴さんを口説き落とすことに集中します。

「それは私たちもしっかり！短い登校時間ではありましたが、その中で私たちには！いつの間にか友情が芽生えていたのです！」

「そ……そうだったの……!？」

……違う気がしてきました。少なくとも友情って、こんな形で結ばれるものではなかったような気がします。友情に対する幻想とかないのですけど……。

「そうだったのです！もうぼっちなんかじゃありません！」

「私は最初からぼっちじゃないわよ！」

意外な反撃を受けました。つまり巴さんには、すでにお友達がい

「ええ、その通りよ。自慢になってしまいかもしれないけど、私には友達が3人もいるわ!」

「なっ……なんですつてええええええ！？」

い……意外過ぎます！！１人で登校していたから、完全に油断していました！３人も友達がいらっしゃるなんて……！私は……私は、とてつもない人に声をかけてしまいました！

「で、でも何で……！？何故それほどのお人が1人で登校してらっしゃるのですか！？」

「だ、だって……佐倉さんは学校が違うし、暁美さんはなんだか人を寄せ付けない感じだし……美樹さんは……」

もによもによ言っているようにしか聞こえませんでした。が、お友

達の名前らしき単語は聞こえました。

それと、最後のほうに見せた悲しげな表情。日だまりのような巴さんに似つかわしくない、暗い影を纏った印象的な表情でした。まるで、もう誰かとは会えなくなってしまったみたい……転校してしまったのでしょうか？

羨ましいですねえ。私もこんな風に、転校を悲しんでくれる友達がほしいです。

「よく聞こえませんでしたけど、そのお友達とは登下校を一緒になさらないんですね？」

「まあ、そうね……一緒に行動するのって、本当に魔獣退治の時からじゃないかしら……」

「……まじゅう？」

「あ……っ！な、何でもないわ、気にしないで！」

「えー、そんなこと言われたら余計気になりますよー。まじゅうって何なんですか！？」

「な……何でもないってばあー！」

昇降口に逃げる巴さんを追いかけます。とても楽しくて、新生活への期待が膨らむ朝的一幕でした。

だから、巴さんを追いかけたせいで遅刻しかけて怒られたことにも後悔はありません。ありませんとも。

「皆さん、今日は先生から大事なお話があります。心して聞くように」

たつぷり怒られたあと、私は自分の入るクラスの担任の先生に連れられて教室の前で待っていました。

先生が『転校生を紹介します』とおっしゃったら教室に入ることになっていますが、ちよっとものものし過ぎませんか……？そんな

心して聞くほどの話題にはなれませんか？

「いいですか！？女子の皆さんはゆで玉子のゆで加減にケチをつけるような男とは付き合わないように！！そして男子の皆さんは！くれぐれもそんな大人にならないように！！」

ただの八つ当たりでした！

ゆで玉子のゆで加減にこだわりでもあるのでしょうか……？それくらいのがままなら聞いてあげてもいいのではと思ってしまうのですが。

「先生が言いたいのは……それだけです……」

それだけなんですか！？転校生の紹介とか無いのですか！？私はどのタイミングで入ったらいいのでしょうか！

「あー、あと転校生を紹介しまーす」

転校生の優先度はゆで玉子以下ですか！？うぬぼれた発言かもしれませんが、私の話題のほうが必要なのでは！？

「毬音さん、入ってらっしゃい」

さっきの剣幕が嘘だったみたいに穏やかな声。できればせめて名字で呼んでほしかったのですが……まあ、前もって言うておかなかった私の責任ですね。

はやる鼓動を抑え、教室のドアに手をかけます。

「ッ」

目。

教室中の全ての目が、私に向けられています。自分の空気と教室の雰囲気のスレを肌で感じます。

怖い。

馴染めなかったらどうしよう。

受け入れてもらえなかったらどうしよう。

恐怖で塗り潰された頭をフル回転させ、巴さんを探しますが見当たりません。そりやそうです。巴さんが同じクラスである保証なんてどこにもありませんでした。私は何を浮かれていたのでしょうか。思わず一步、下がってしまいます。途端にクラス内に散らばっている瞳に数多の色が宿ります。

同情 憐憫 失望 。

引いちゃいけない。その瞳の色を見てギリギリそう思い直し、教室に足を踏み入れ

「あっ！」

緊張でおぼつかない足が、存在しない何かにつまずいて転んでしまいます。倒れるとともに教室のどこかで失笑が起きました。

「あらあら、緊張しちゃっているのね。大丈夫よ、落ち着いて」

何が大丈夫なの？ 落ち着いてって何？

先生の優しささえ敵に見えるほどの惨めさに支配され、1分にも満たないわずかの時間で、私はすっかりひねくれて、いじけてしまいました。

完璧に孤立した。みんなが私を嘲笑っている。ここにも、私の居場所は

「……立ちなさい」

凜とした声とともに、綺麗な右手が差し出されました。顔をあげると、そこには とても同世代とは思えない大人びた女の子が、私に手を差し伸べていました。

私のひねくれなんて中二病の延長でしかないと悟らされる深い瞳に、明かりのない夜のような黒の、腰までありそうな長い髪。その人は、1人だけ時間軸がズレているみたいに、異質なくらい完成された雰囲気を持っていて 。それだけに、赤いリボンで結わえ

られたツインテールがとてもミスマッチでした。

「えと……ありがとうございます」

「どういたしまして」

淡々と返されてしまいました。私、また何か失言してしまったでしょうが……。

「間違えたのなら、やり直さないで、諦めないで、何度でもね」

先人からのアドバイスよ。そう言い残して、彼女はさっさと自分の席に戻ってしまいました。最後まで淡々とした人でしたね……。

こう言っちゃうと失礼ではありますけど、あまり他人に親切にするタイプの人にも見えませんし、そんなものかもしれません。

「ありがとね、ほむらさん。出来た生徒が持てて、先生も鼻が高いわ」 本当に嬉しそうな笑顔を浮かべる先生。さながら我が子を自慢する親バカ母さんみたいです。……誉め言葉ですよ？

しかしあの人、ほむらさんって言うんですね……。やつぱりかっこいい人は名前もかっこいいです。私もあんな風になりたいですね！。まず無理でしょうけど。

「さて、それじゃ毬音さん、自己紹介をしてちょうだい！」

先生に促され、自分が転校生だったことを思い出します。間違えたのならやり直せ……か。よし！

「先生、すみません。教室に入るところからやり直しちゃ駄目ですか！？」

「……へ？」

呆然とする先生を横目に、私は入り口まで戻って再度スタンバイ。戸は開けたままですが。「……えーと……じゃあ毬音さん、入ってらっしゃい」

「はいっ！」

リテイクに応じてくれました。この学校はいい人ばかりです。改めて中に入り、黒板に自分の名前を書いたあとで、私はもう一

度さっきの景色に目を向けます。

知らない人ばかりの、知らない教室で、
新たな自分を、始めるために。

「築地 毬音です！名前のせいで、料理のほうのマリネが若干嫌いです。よろしくお願いします！」

それが君の祈りかい？（前書き）

「ちよつとちよつとー、何やってんのアンタ達

「あれ使い魔だよ？」「グリーンフシード持つてる訳ないじゃん？」

「魔法少女？」

「やっぱり来たね杏子」

「あつ、逃げちゃう！」

「追わなきゃ…」「！！」

「だからやめろっつーの」

「何すんの！？あれ放つといたら誰かが殺され…」

「当たり前だろ？」

「四、五人喰わせて魔女にすりゃあ「グリーンフシードも孕むのにさあ
「卵産む前のニワトリ締めてどーすんの？」

「な…あんた、魔女に襲われる人達を見殺しにする気！？」

「…なんかさあ、大元から勘違いしてるよねえアンタ？」

「弱い人間を魔女が喰う」「その魔女をアタシ達が喰う」「それが当たり前のルールでしょ？」「ガッコーで習ったよねえ食物連鎖ってやつ？」

「まさかとは思うけど…人助けだの正義だの、そんな冗談かます為に「契約交わしたわけじゃないよねえ？」」

公式コミカライズ『魔法少女まどか マギカ』 2巻第5話より

それが君の祈りかい？

「あの……築地さん」

「ほわあっ!？」

転校初日最初の休み時間。まさか声をかけていただけとは思っていなかったたので、かなりビビりました。連鎖的に、相手もびっくりにしていましたが。2連鎖って、おじゃまぶよをいくつ降らせるんでしょう。

「えっと……驚かせてしまつてごめんなさい、築地さん。あなたにどうしてもお聞きたいことがありましたので……」

「聞きたいこと……ですか？」

「はい。……こんな子を探しているんですけど、どこかで見かけたことはございませんか？」

そう言いながら、一枚の紙を取り出す女生徒さん。なんか言動に気品が満ち溢れた人ですね……。お嬢様のイメージを体現したみたいな人です。ちなみに巴さんのイメージは『優しいお母さん』です。

「美樹……さやか、さん？」

「……はい。何かご存知ありませんか？」

「うーん……ちよつとわかりませんねえ……」

「……そうですか」

渡された紙には『探してます』の文字と、快活そうな女の子の写真。これってまさか……

「……行方不明ですか？」

「はい……少し前から家に帰ってないらしくて……。警察の方が捜してくださっているんですけど……」

そう言つて、しゅんとしてしまうお嬢様。美樹さん……なんだか聞き覚えのあるような名字ですけど……。

「あ、巴さんだ」

「？ その方がどうかないましたか？」

「いえ、今朝お友達になった人なんですけど、その巴さんのお友達のお名前に似たような名字があったなー、って思いまして」

まあ、はつきりそうと聞いたわけではないですけど。

「さやかさんのお知り合いの方でしょうか……？ 解りました、その方にもお聞きしてみます」

「聞き間違いとかだったらごめんなさい……」

何しろもにもよって言ってる中からサルベージしたので、自分がいい加減なことを言ってやしないか不安です。

「いえ、今は藁をも掴みたい気持ちですので。協力しようとして下さるだけありがたいですわ」

『ですわ』って言う人初めて見ました。この人は生粋のお嬢様なようです。

「ではっ、他に協力できることがありましたらお申し付け下さいです！」

「では、さやかさんを見かけましたらご一報ください。失礼します」
深々とお辞儀をして自分の席に戻るお嬢様。次の時間の準備をしているようです。どれどれ、私も準備しますか。

「あの、すみません。まだ教科書がないので、見せていただいていますか？」

「……構わないわ」

「他の時間もお願いしたいのですけど……」

「ええ、どうぞ」

「……」

「……」

「……」

「……何？」

「いえ、あはは……」

相変わらず永久凍土な暁美さんです。やっぱり、何か失言してしまったのでしょうか……。この際むしろ、失言が原因であってほしいです。

「や…… やつと終わりました……！」

今日最後の授業が終わり、やつと解放された気分になります。転校による範囲ボケ（私のいた学校とやってる範囲が違います！）の疲労もありますが、一番はほむらさんの教科書を見せていただいていたことでしょう。

彼女の持つ雰囲気というか、そういうものに気圧されての授業はかなりしんどかったです。会話も無いし無表情だし……話しかけても一言か二言で終わってしまっただけなんです。やっぱり嫌われているのでしょうか……？

「……とりあえず巴さんを探して、一緒に下校してもらいましょう……」

なんか今は、無性に巴さんの笑顔が見たいです。たぶんあの人は癒し効果があります。マイナスイオンな巴さんです。教室を出て、巴さん捜しの旅に出ます。

「あり？」

廊下に出ると隣の教室の入り口に、今朝がた見かけた金髪のコロネが見えました。あれってもしかして……

「……巴さんですか？」

「あつ！つ、築地さん！」

「………？」

なんか声がうわずってますね。心なしか顔が赤い気がしますし、どうしたんでしょう。

「この教室の人にご用ですか？」

「い、いえ。そうじゃないけど……」

「………??」

どうも煮え切らないですね……。まあいいです。言いたくないことを無理に聞くつもりもないので。それより、せっかく探す手間が

省けましたし、下校のお誘いをしましょう。

「あの、巴さん」

「えっ！？あ、なっ何かしら築地さん？」

「……………えと」

「？ どうしたの？」

「……………その」

「……………？」

て、照れくさいです！なんか告白の現場みたいな空気が漂い始めています！というか、我ながら友達耐性無さすぎですよ！ミッシェンは一言『一緒に帰りませんか？』と聞くだけですよ！？こんなピンク色の空気になる要素皆無ですよ！

まずいです、このままではキーワード欄に『百合』の単語を加える羽目になってしまいます。それはちよつと嫌です、私はノーマルです！大丈夫、聞くのなんか一瞬です。言ってしまうえば何でこんなに恥ずかしがっていたのかわからなくなるに決まっています。『一緒に帰りませんか？』と一言聞くだけ、決してインポッシブルなミッシェンではありません！

「「あのっ！！」」

シンクロ率100%、余計恥ずかしくなりました。もうトム・クルーズさんを連れてくる以外の解決策が見当たりません。

しかし息ピッタリでしたねえ……………もしかしたら巴さんも下校のお誘いを試みているのかもしれない。

そんな期待とともに、巴さんを見てみると、目を潤ませながらお顔を真っ赤にしていました。目が合うと、お互いすぐに視線を反らします。たぶん私も、同じような顔をしていたんでしょうねえ……………。なんか今なら、巴さんが何を考えているのが全部わかる気がします。

何かこの状況を打破するカードがないか探してみると、私の後ろ

に、なぜか幸せオーラ全開の弛みきった表情をしたお嬢様を発見しました。水没に藁です！……『渡りに舟』が正しいんでしたっけ？
「と、巴さん！そういえばあちらのお嬢様が、巴さんにお聞きしたいことがあるって！」

「そ、そう？じゃあ声をかけてみましょうか！」

「ぎこちないのはお互い承知です。」

「こんにちは。築地さんから聞いたんだけど、私に聞きたいことって？」

さすがに友達を3人も持つ女性は違います。知らない人にああも自然に声がかけられるなんて……。

なんとか持ち直しそうな空気は、しかしお嬢様の返答で一気に台無しになりました。

「あら、私のことはお気になさらず……。私にはお二人の禁断の愛を邪魔するつもりはございませんわ……！」

「……えっ!？」

「ストップです廊下の皆さん！少し落ち着きましょう、私たちの間には何か誤解があります！」

「ファインプレイです私。危うく次の学級新聞の一面を飾ってしまふところでした。」

「誤解……まさか！すでに婚約まで!？」

「何でそうなるの!？」

「校内での携帯電話の使用は禁止ですよ！メールも電話も止めて下さいお願いします！」

「大丈夫ですわ築地さん。私だけはお二人の恋を応援します！」

「ちよつと黙りやがれです腐りお嬢様!!」

「築地さん！まずみんなの誤解を解きましょう！」

「それで、私に聞きたいことって？」

お嬢様シヨックを鎮め終えたあと、巴さんは何事もなかったかのようにお嬢様との会話を再開しました。これが友達を3人も持つ人の対人スキルですか……！やはり格が違います！

「あつ、はい。先輩はさやかさん……美樹さやかさんのお知り合いだとお聞きましたので、彼女について何かご存知ないかと思いついて……」

美樹さやか。

その名前を耳にした瞬間、再び巴さんの表情が曇ります。

「……ごめんなさい。何も知らないわ」

「……いえ、こちらこそ。では、何かあったらご連絡下さい」

そう言って一礼すると、百合趣味の腐譲さまは階段へ向かって行きました。

「……巴さんって巴先輩だったんですか？」

「えっ？ああ、そういえば、学年を教えてなかったわね。ええ、私は三年よ」

「そうだったんですか！？」

衝撃の事実発覚です！てことは、私は先輩のことをぼっちさんとかコロネさんとか呼んでたってことですか！？

「……でも、何で先輩は私が2年生だってわかったんですか？教えてなかったのは私も同じなのに……」

「二年生に転入生が来たらしいって噂は、私にも届いていたわよ。あと、別に呼び方も変えなくていいわ。今まで通り呼んで頂戴」

そう言ってにつこり微笑む巴さん。うん、やっぱり巴さんにはこういう表情がよく似合います。

「それじゃ、帰りましょう築地さん」

「あ、はい！」

先に言われてしまいました。なんか負けたみたいで悔しいので、反撃を試みます。

「ところで巴さん。一緒に帰るなら、せっかくですし寄り道しませんか？」

「本当！？じゃあおすすめの喫茶店があるから、そこに行きましょー！」

普通に喜ばれました。正直照れて真っ赤になる巴さんを期待していたので、反撃失敗ですね……。

でもまあ、巴さんの幸せそうな笑顔が見れましたから、やっぱりちよつと得した気分です。

「築地さん、転入初日はどうだった？」

喫茶店へ向かう途中、目的のお店の話題が落ち着いたあたりで、巴さんが私にそんな質問を投げかけました。

「……とりあえず、転入生の紹介よりゆで卵の話題が優先されるとは思いませんでした……。」

「……ゆで卵？」

「はい、担任の先生が『ゆで卵のゆで加減にケチをつける男とは付き合っな』とか……」

「……まただめだったのね……」

「また！？」

前にもこんなことが！？

「聞いた話だと、他には卵の焼き加減とか卵の白身がどうか……目玉焼きか卵焼きかで破局したこともあったかしら」

「卵に呪われてるとしか思えない男性遍歴……！」

「ご先祖様が卵を粗末に扱ったりしたんでしょうか。あまりにも謎過ぎます。」

「あとは……そうそう！私のクラスにすっごくかつこいい女性がいっぱいいるんですよ！」

「……中学生に『女性』って……」

でも私には、あの完成度の人を女の子とは呼べません。

「なんか1人だけ違う時間を生きてるみた「ああ、暁美さんのことだったのね」って情報だけで特定できるんですねやっぱり!」

3年生にまで知れ渡っているとは……。さすが暁美さんです。

「確かに暁美さんは三年生の間でも有名だけど……」

唐突に紅が降ってきました。

身を包む衣、落下の軌跡と戯れる髪。その全てが、それこそ焔の
ような紅。それが人だと理解する頃、紅の人が忌々しげに呟きます。

「ちっ……困まれちまつたか」

「^つ?」

反射的に辺りを見回すと、そこには黒。

[illegible]

おびただしい数の黒い何かが。見渡す限りに湧いて出てきます。

「う……う、うううううううう……！」

「魔獣……っ！？何よこの数！」

「おっマミ！ちょうど良かった……って一般人連れかよ！？」

あれ！？赤い人はともかく巴さんも結構冷静です！？もしかしてこーいうことって、見滝原では日常茶飯事なのでしょうか！？

「いや、ただの一般人というわけでもなさそうだよ杏子。この子に

はどうやら素質があるみたいだ」

今度は喋る白いぬいぐるみです！？もう私には見滝原という町がわかりません！！

「僕はぬいぐるみじゃな」心を読まれました！？このぬいぐるみさんにはプライバシーに対する意識が欠如しています！」いや、まず落着き「よく見るとなんかえっちい感じがしますねこのぬいぐるみさんは！白とピンクの配色がなんかえっちいです！」いいから僕の話聞いてよ毬音「名前まで抑えられています！このままでは私はいやらしい犯罪に巻き込まれてしまうかもしれません！そうなる前にくたばりやがれで「まずはあんたが黙れ！」

赤い人が槍の持つところで叩いてきました！さてはこの赤い人もグルですかっ！

「はい、深呼吸してー」

「すー、はー。すー、はー。」

巴さんに言われるがままに深呼吸します。……なんか保母さんにあやされる子供の気分です。

「佐倉さん、まずは築地さんを安全なところへ！」

「わかってる！」

あれ、なんか赤い人と巴さんが親しげです。てことは、悪い人たちではないんですかね？

「でも逃げようにも、周りのはあの黒いのでいっぱいですよ？」

「あたしがいっくら抑えるから、マミは退路を確保してくれ！一旦体勢を立て直す！」

「任せて！」

そんなやり取りの中で、巴さんは何か宝石のようなものを取り出して構えます。すると、宝石が輝き光が巴さんを包み、あっという間にファンタジーな服装に変化しました。

「彼女たちは魔法少女。今僕らを囲む魔獣と戦う者さ」

触り心地の良さそうなぬいぐるみさんが、私の疑問に解を示してくれます。……どうでもいいですけど、その耳から生えてるのは何

なんですか？

「ティロ・ファイナーレッツ！！」

巴さんが叫ぶと、現れ出でた大きな銃からいかにも必殺技な一撃が放たれ、黒い壁に大穴を空けます。

「あそこから出るぞ！」

赤い人の号令で駆け出す私た……って速あ！？もう外まで走り抜けちゃいました！？

「うわわわわわ！」

なんか黒いの（魔獣でしたっけ？）が夕立みたいに降ってきます。もしかしてこれ……デッドエンドですか？

「掴まって、築地さんっ！」

目の前に伸びてきた薦みたいなのかと、巴さんの声。考えるより早くそれを掴むと、薦は私の腕に絡みつき、「うひゃあああああ！！」出口目掛けて、おもいつき私をぶん投げました！

「ナイスパスッ！」

出口まですっ飛んだところで、赤い人が私をキャッチしてくれました。見滝原中学では3年次に職業体験があるそうですが、一足先にボールを職業体験することになるとは夢にも思いませんでした。母なら出てきたんですけどね。

「ほら、さっさと逃げな！」

そう言って私を地面に下ろす赤い人。口調は少し乱暴ですが、下ろし方は丁寧でした。

「逃げろって……赤い人さんはどうするんですか？」

「……それ、あたしのことか？」

「？他にも赤い人がいらっしやるんですか？」

「いや、いねーけどさ。なんか他になかったのか……？」

「じゃあ絶壁さん」

「お前よりはあるわー！」

……返す言葉もございません。

「もちろん、戦うのよ。それが私たち魔法少女の宿命だから」

逸れつつあった話題を巴さんが戻します。戦う……あの大量の、魔獣と。

「……平気、なんですか？」

「当たり前だ。あたしらはあんなのにやられるほどヤワじゃねえ」

「パパッと終わらせちゃうわね、築地さん」

2人はそう言って微笑み、黒の大群と対峙します。そして……

戦いが始まりました。

「……本当に、大丈夫なんでしょうか……」

「殺されることはないと思うよ。マミも杏子もベテランだからね」

再び私の疑問に答えるぬいぐるみさん。張り付けたような表情が不気味です。

「ただしあの数だ。ひよつとしたら力尽きて消滅してしまうかもしれないね」

「しょう……めつ……っ!？」

「そうさ。彼女たちの魔力の源であり、彼女たち自身でもあるソウルジェムは、魔法を使うたびに濁っていく。そしてその濁りがソウルジェムを黒く染めるとき、魔法少女は消えてしまうのさ」

「そんな……っ！助けてあげないんですか!？」

せつかく巴さんと友達になれたのに……赤い人にも、まだお礼を言っていないのに！

「無理だね、僕の力の及ぶところじゃないよ。そもそも、力尽きた魔法少女がなぜ消滅するのもわかってないんだから」

僕に彼女たちは助けられない　ただし。

「君にはその力がある」

……………。

え？

「どういう……ことですか？」

「君には魔法少女の素質があるってことだよ」

あの2人を助けることのできる力をもっている。ぬいぐるみさんはそう言って、張り付けたような笑顔を私に向けます。

「本当……ですか？」

「やめろ！耳を貸すなっ！」

ぬいぐるみさんとの会話を聞いていたらしく、赤い人が戦いながら私に向かって叫びます。

「奇跡はタダじゃねーんだ、希望を求めた祈りは呪いとして自分に返ってくるんだ！他人のために祈って消えてった馬鹿をあたしは知っている！」

その馬鹿な人は、赤い人の大切な人だったのでしょう。赤い人は切々と、魔法少女になることの危険性を私に語ります。

「奇跡がタダじゃないというのはそのとおりだ。そこにもう1つ加えておくと、魔法少女になるには体から魂を抜き取ってソウルジェムに変えなければならない。杏子はゾンビって言っていたかな。人間をやめて、魔獣との戦いの運命に投げ込まれ、最期は消滅する。その代わり、僕が1つだけ君の願いを叶えてあげられる。これらが魔法少女になるメリットとデメリットだ」

それでも良ければ

「僕と契約して、魔法少女になってよ！」

「……私……「やめろっつってんだろ！！」」

ぬいぐるみさんに返答を返そうとしたら、赤い人の悲鳴にも似た叫びがそれをかき消してしまいました。

「舐めんなよ……魔法少女はお遊びじゃねーんだ。命を危険に晒すってのはな、そうするしか他に仕方ないヤツだけがやることだ！幸せ家族に囲まれて何の不自由もなく暮らしてる奴が一時の義侠心で魔法少女になろうなんざあたしが許さない！」

そつえば、魔法少女になれば願いを1つ叶えるってぬいぐるみさんが言っていました。赤い人は 何を願ったのでしょうか。命を

危険に晒してでも叶えたい願いだっただのしょうか。あるいは、命を危険に晒したことを後悔するような願い　　だっただのしょうか。

けど、赤い人に背負うものがあるように、私にも譲れないものがあります。

「なら私は、自分のために祈って魔法少女になります。それならいいですよね？」

「……………勝手にしろ……………っ！」

忠告を聞き入れない私に失望したのでしょうか、赤い人は悔しげに吐き捨てます。

「それに、私の幸せ家族は先日他界しちゃいましたから」

赤い人に、私の呟きは聞こえたでしょうか。今はそれより考えなければならぬことがあるので、そっちに集中しましょう。

「先に言っておくと、死んだ人間を生き返らせることは君の魔力では不可能だよ。一時的に魂を呼び戻すことが限界だ」

……………じゃあ私、特に願い事ないんですけど。他人のためには祈らないって、さつき赤い人と約束しちゃいましたし。

「そのお願いって、後回しは出来ないんですか？」

「祈りを叶えるのは魔法少女になる見返りであると同時に、君の魔法の性質を決定する意味もある。後回しになんて出来ないよ」

「うーん……………」

魔法少女、めんどくさいですねえ……………。転校手続きの次くらいにめんどくさいです。

「あつ、そうだ」

1個だけありました。ついさつき、私自身が自分の意思で望んだ願いが。

「また後で私の願いを叶えて下さい」

「……まさか、それが君の祈りかい？」

ぬいぐるみさんが、心底呆れたような顔でそう聞いてきます。別にいいじゃないですか！何心からの呆れ顔を披露してるんですか、張り付けたような表情があなたの持ち味でしょう！

「……まあ、別にいいけど。一応契約は成立だ」

ぬいぐるみさんがそう言うと、光が私の体を包み、純白の宝石が現れます。……本当にどうでもいいですけど、締まらない契約ですねえ……『一応』ってなんですか『一応』って！

とりあえずこれで、私も戦う力を得たわけですね。これである2人にお力添えできます。

「さあ、受け入れるといい」

浮かび上がった宝石……『ソウルジェム』を手に取り、手に入れた力を解放します。

「それが君の運命だ」

「……変！身ッー！」

……これ仮面ライダーでしたっけ？まあいいじゃないですか、今日は無礼講です。

魔法少女・築地 毬音の初陣ですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2755z/>

魔法少女まりね マギカ

2011年12月20日18時47分発行